

図書新聞 思考の隅景色 60

秋の風更け行くままに長月の。有明寒き朝風に

-- 謡曲「松虫」にみる哀惜の転移と中世酒場のメンタル・ケア

『松虫』という謡曲は、金春禅竹の作。けっして広く知られた曲ではない。だが秋の夜長の酒宴は、思わぬ連想を誘うものらしい。舞台は大阪の阿倍野。いまでこそ商都の歓楽街だが、当時なら難波のうら寂れた場末の酒場あたりを想定したものか。そしてこの曲に「同性愛」を見る解釈が、岩田準一『男色文献書誌』や堂本正樹『男色演劇史』以来おこなわれてきた。再三見かける見知らぬ客に、ワキ役の「酒売り男」つまりバーテンが、「今宵はごゆっくり」、と声を掛けるところから舞台が始まる。バーテンの誘いにのった客は、こんな歌を口ずさむ。

《今は秋の風、暖め酒の身を知れば、薬と菊の花のもとに、帰らんことを忘れ、いざや美酒を愛せん。たとひ暮るとも、たとひ暮るとも、夜遊の共に馴れ衣の、袂に受けたる月影の、移ろふ花の顔ばせの、杯に向かへば、いろもなお勝[まさ]り草。千年[ちとせ]の秋も限らじや、松虫の声も尽きじ、壁生草[いつまでぐさ]のいつまでも、変はらぬ友こそは、買い得たる市の宝なれ、買い得たる市の宝なれ。》

菊に松。長寿を暗示する、これらの植物の名に寄せて、友情の長からんことを歌い、そうした友を得たこの市場を言祝ぐ歌だ。秋風のゆうべ、酒を酌み交わす杯には月影が映り、杯を重ねるにつれ、友の顔にも菊のように紅が指しまさってゆく。いかにも艶っぽい情景だが、さてこの「友」とは誰を指しているのだろう。右の歌に「松虫の音に友を忍ぶ」客の姿を見いだして訝しがるバーテン(ワキ)に対して、客(幽霊)は、実は自分にはかつて「死なば一所」とまで思っていた友がいたのに、空しくなってしまった、と語り始める。田代慶一郎氏は、これでは三角関係ではないか、との疑念を提出した。先の歌で「買い得たる市の宝」とは、酒に誘ってくれたバーテンであり、ここで既にバーテン(ワキ)と客(シテ)とのあいだには濃密な交情が成立している。だが、幽霊の客(シテ)とバーテン(ワキ)のあいだがデキてしまえば、先に死んだ男はソデにされてしまって、浮かばれまい、というわけだ。そもそも右の歌を聞いたバーテンがそこに「友を忍ぶ」客の姿を見いだすのも、唐突だ、とのご意見である。

だがこの解釈は無理だろう。というのも、続く客(シテ)の文句に、こうあるからだ。亡き友を偲ぶ思いなど、「土中の埋もれ木」のように朽ち果てたかと思っていたのに、「朽ちもせで松虫の、音に友を忍ぶ名の、世に漏れけるぞ悲しき」と。ここでシテは、なぜワキが自分の哀悼を見破ったのだろう、と訝しがり、自らの秘めた思いが露見したのを、「悲し」んでみせている。客として現れた幽霊の男と、バーテンと。ふたりのあいだに新たな友情が芽生えたことは、小山弘志氏も示唆するとおりだろう。だが歌に現れる「友」が自分ではないことを察したがゆえに、バーテンは客に、そなたの忍んでいる友とは誰か、と尋ねた。さもなくば辻褄が合わない。客がバーテンの姿を形代として、かれを通して亡き友の面影を忍んだ、というのではない。むしろ、亡き友と客(シテ)との関係が、いわばカウンセリングの場面での転移よ

ろしく、客(シテ)とバーテン(ワキ)の關係に重なった、と見たほうが良いだろう。田代解釈を押し進めれば、バーテンと幽霊の仲を恨む、亡き友の声の代弁こそ、酒宴の周囲ですだく虫の音、ということに成りかねない(佐伯順子氏の指摘)。だが中入りの後に、もはやシテにもワキにもこれといった動作はなく、ワキは宴席に集う人々の右代表へと退き、舞台は、ただ亡き友への弔いを込めた、しめやかななかにも趣深い、秋の夜の宴へと移行する。

《きりはたりちよう。つづりさせてふ蝨倅[きりぎりす]茅蝸[ひぐらし]。色々の色音のなかに。わきてわが忍ぶ。松虫の声。りんりんりんとして、夜の声めいめいたり/すはや難波の鐘も明方の。あさまにもなりぬべし、さらばよ友人名残の袖を。招く尾花のほのかに見えし。跡絶えて。草茫茫たるあしたの原に。蟲の音ばかりや。残るらん。蟲の音ばかりや残るらん。》

かくして幻は、百鬼夜行のように、忽然と消え、あとは朝風吹く野原のなかに、蟲の声のみ、という情景が広がる。この一曲、そもそもは難波人に捧げた宴席の出し物でもあったのか。